塚本先生を偲んで

池　上　　啓

塚本先生が亡くなられて１年が過ぎた。先生の学問的業績などの固い話題は後の資料に譲ることにして、ここで私は、同僚として過ごした20数年間の先生の思い出を語ることにする。

塚本先生は義侠心の持ち主であり、酒豪でもあり、また、花を愛する人でもあった。古代文学が専門の故か、山桜のような、ひっそりと咲く淡い色の花を好まれた。

義侠心と言えば、私がまだ駆け出しだった頃に遭遇したトラブルを思い出す。決戦に臨もうとする若い私を制して、「上役の自分が話をつける。あなたはここにいないほうがいいから、今日のところは帰れ」と言われて、うまく交渉してくださった。おそらく、若い者がただ騒いだだけでは、個別事例は解決したとしても、長い目でみた場合の根本的問題は解決しないという判断がおありだったのだと思う。

酒豪の件に関しては、たしかに酒豪ではあられたが、酔いつぶれることも何度かあり、同僚と両脇を抱えてご自宅まで連れて帰ったこともある。開放的な性格ゆえ楽しい酒であり、たとえ両脇を抱えて連れて帰る時でも、不愉快なことは全くなかった。その時先生は、自分が最近見に行ったどこそこの花がいかに素晴らしかったかなどを、まるで夢見る少女のように語っておられた。

酒の話題は悪口のように聞こえるかもしれないが、私が言いたいのは、塚本先生はご自分を飾ることなく全てを曝け出した上で、人や組織や問題に正面から向き合おうとする覚

悟を持った人であったということである。だから、周りにいる者たちは、塚本先生が「今は細かいことはいいから、とにかくこれをやってよ！」と仰った時に、「まあ、塚本先生がそう言うのだから、とにかくやろうか」という気持ちになるのである。このような特質を一般に「人望」と言う。塚本先生は、なにより人望のある人であった。

昨年の紀要に寄せられた諸冨教授による塚本先生への追悼文で、諸冨教授は「塚本先生は夢を語ることのできる数少ない教員の一人であった」という趣旨のことを述べておられる。その通りだと思う。塚本先生は、人間文化学部はどういう学部でありたいか、学生にどういうことを教えたいかという夢を常に語る人であった。その夢は決して抽象的なものではなく、実現可能な具体的な「夢」であった。そのような夢を語ることのない教員は教員たり得ないし、語るべき夢を持たない学部など存在するに値しない。われわれは、塚本先生の意志を継いで、人間文化学部をこれからも夢を語る学部として発展させていこうと思う。

以上